

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：13101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24720090

研究課題名(和文) 中世後期和歌会関連古記録についての基礎的研究

研究課題名(英文) Basic study on 31-syllable Japanese poem society connection historical records in the latter half of the Middle Ages

研究代表者

山本 啓介 (YAMAMOTO, KEISUKE)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：50601837

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：和歌会関連古記録の抄出史料である和歌会部類記の整理と分析を行った。それを基盤として、室町期の古記録から和歌会関連記事を抽出し、この時代における和歌会の在り方についての考察を進め、和歌会史の整備を行った。それと併せて、室町後期の後柏原天皇時代の内裏月次和歌の詠進の在り方と、そこで詠まれた和歌の作風との関連性の一端を明らかにした。

研究成果の概要(英文)："Wakakaiburuiki" is pulled out the record about the meeting of the 31-syllable Japanese poem from historical records. I analyzed it with the rearranging of this "Wakakaiburuiki". And I pulled out the record about the meeting of the 31-syllable Japanese poem from historical records of the Muromachi era and considered the way of the meeting of the 31-syllable Japanese poem. And I arranged history of calendar of the meeting of the 31-syllable Japanese poem. With it, I considered the form of a 31-syllable Japanese poem carried out and the relation with the work every month in the Imperial Palace of the times of the Emperor Gokashiwabara of the Muromachi era.

研究分野：中世和歌

キーワード：和歌会 和歌史 室町和歌 三条西実隆 後柏原天皇 月次和歌

1. 研究開始当初の背景

中世後期の和歌は近世和歌さらには近世文化へも大きな影響を与えたものとして近年注目されつつある。しかし、その研究は今のところ充分には進んでいるとは言い難い。主な理由は、その作品数が膨大であることによる。さらに加えるならば、この時代において、和歌がどのように詠作されていたのか、いわゆる場の問題においても解明が進んでいないことも一因と思われる。和歌が詠まれた代表的な場である和歌会の在り方の分析と整理と、それを踏まえた上での作品分析という点で、多くの課題が残されており、その解明が望まれる状況にあった。

2. 研究の目的

古記録と作品の分析を通じて、室町後期に行われた和歌会の在り方を明らかにし、和歌会史を構築する。その上で、個々の和歌会の特徴を踏まえ、そこで詠まれた和歌の作風との関わりについて考察し、より立体的な作品読解研究を提示する。

3. 研究の方法

未整理のまま多数伝来している和歌会部類記(和歌会古記録の抄出資料)の整理と分析を行い、これを基盤としつつ古記録類から和歌会関連記事を抽出し、中世に行われた各種の和歌会の様相の復元的考察を行い、和歌会史を整備する。併せて、詠作された状況と対応させつつ、同時代の和歌を読解する方法を以て、場と作風との関わりを考究する。

4. 研究成果

膨大に伝存する中世後期の古記録の中から和歌会の古記録を網羅的かつ全面的に抽出することは現実的には不可能と判断される。そこで、後代において和歌会の古記録を選別し、抄出した資料である和歌会部類記に注目した。この和歌会部類記の伝本調査を進

め、そこに見える古記録の読解・分析を進めた。そして、室町後期に和歌が詠作された状況について、古記録からの分析を行い、現存作品の読解を進め、場と作風についての影響関係を考察した。その成果は学会での口頭発表と論文で発表した。詳細は下記の通りである。

口頭発表(1)「和歌会の形式と詠作意識との関わりについて 室町期を中心に」(和歌文学会例会、2012年7月)では、後柏原天皇時代の内裏月次和歌の様相と作品について、永正五年の一年間を主たる対象に設定して分析・考察を行った。この月次和歌の詠作形式は、和歌会を開催せず、参会を必要としないものであり、参加者への負担が少なく、時局の影響も受けにくい、継続しやすいものであったと見られること、毎月交互に行われた月次懐紙・短冊の和歌は、それぞれ異なった工夫・態度で詠作されていたと見られることを述べた。

この発表の成果の一端を、論文(1)「後柏原天皇時代の内裏和歌活動について 時代背景と形式」(「日本文学」62-9、2013年9月)にまとめた。後柏原天皇時代の文龜二年より、参会・披講を伴う晴儀の御会始が行われたが、後年の御会始には、不参の者も少なくなかった。貴族達の困窮が一因であったとみられる。そうした中、内裏では参会・披講は行わずに、懐紙・短冊のみを詠進する形式の月次和歌も行われた。こちらは、比較的流動的な方法で懐紙・短冊に和歌を書いて提出するものであり、少ない負担で和歌活動を継続することが可能な形式であったと見なすことができる。以上のように、非常に苦しい時代背景の中で、彼らがその状況に対応した和歌活動をしていたことを明らかにした。さらに、論文(2)「後柏原天皇時代の内裏月次和歌 作風と「談合」」(「和歌文学研究」107、2013年12月)では、そうした詠作形式が作風に与えた影響について考

察した。後柏原天皇時代に内裏で行われた月次和歌は、懐紙と短冊を毎月交互に詠進するものであり、短冊和歌は一見穏当でありつつも、先行例の見出せない表現が少なからず詠まれている。月次懐紙和歌においては全員が同一の題を詠むため、類似の作が多くなるはずであるが、個々の作を比較するとむしろそれぞれの相違が目につく。彼らは詠進の前後に「談合」を行い、相互の作を念頭に置きながら詠作を行っていたと見られることを述べた。

上記の研究の余滴として和歌会作法書伝受とも密接な関わりのある蹴鞠伝授書の奥書を中心に、論文(3)「蹴鞠伝授書から見た室町・戦国期における飛鳥井家とその周辺」(「国文学研究資料館紀要 文学研究編」40、2014年3月)にその成果をまとめた。飛鳥井家の蹴鞠伝授書は、現在のところ応永一六年(1409)の雅縁のものから、慶長一八年(1613)の雅庸まで計三七種類を確認している。それらの伝授奥書から飛鳥井家と門弟との関わりについて分析し、室町から近世にかけて、公家や守護大名、地方武士に至るまでの広い階層で伝授が行われていたことや、地方下向中の伝授や口伝を筆記したものなどの様々な伝授形式があったことを明らかにした。

以上のように主として後柏原天皇歌壇の和歌活動と作風の一端についての研究を進めて来たが、新たに問題として浮上したのは、当時の和歌の在り方が必ずしも和歌会での披講を前提として詠作されていたわけではないという問題であった。この問題をめぐって、口頭発表(2)「披講を前提としない和歌の詠作と鑑賞態度について」(中世文学会秋季大会2014年10月)を行った。上述のように、室町期の内裏月次和歌は参会・披講を行わず、提出された詠草料紙を取り重ねる形式で行われていた。では、披講を前提としない和歌は、どのような態度で詠作され、享受されたのか。その前提として、彼らは古記録の記述において

動詞「見」と「読」を使い分けており、月次和歌の多くは声を伴わない「見」によって鑑賞されていたことを明らかにした。その上で、問題の室町内裏月次和歌には歌題から外れた季を初句に配した作が少なからず詠まれていることを手がかりに、彼らの創作と鑑賞の在り方を述べた。

同発表の成果は論文(5)「披講を前提としない和歌の詠作と鑑賞態度について」(「中世文学」60、2015年6月)にまとめ、当時彼らが行っていた声を伴わない「見」という鑑賞は、今日の黙読とは異なるものであり、和歌会において声として享受する感覚に近いものであったことを論じた。

以上の和歌会等における詠進の在り方と記録類に見える和歌会関連用語についての研究成果は、『和歌文学大辞典』(古典ライブラリー2014年12月)において執筆を担当した「詠進」「続歌」「通り題」などの項目にも反映されている。

さらに、口頭発表(3)「和歌会部類記について」(和歌文学会例会2016年1月)では、これまでの部類記研究の総括として、計二十種類の和歌会部類記の伝本整理と所収古記録の分析を行った。その中には、これまで注目されてこなかったと思われる、『伏見院宸記』徳治二年の京極派の歌会や、『元長卿記』大永五年の後柏原天皇両席御会や、『雅庸(雅継)卿記』天正一六年の聚楽第行幸和歌の記事も含まれることを指摘した。また、和歌会部類記の資料的性格の分析も行い、これらの中には南北朝期に原形の一部が既にまとめられていたと見られる書もあり、室町期の内裏周辺で享受されていた形跡も確認した。さらに、和歌会部類記所収の記録は、内裏・仙洞で催された歌会が多くを占めていることから、特に重要と見られる中殿御会と三席御会について、各時代の在り方と変遷について分析を行った。本発表の成果は近日中に論文化する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

1. 石澤一志・酒井茂幸・武井和人・日高愛子・山本啓介「室町期歌会資料集成稿 釈文と略解題 (一)」(「研究と資料」73、2015年6月)、共著・査読なし。

2. 山本啓介「披講を前提としない和歌の詠作と鑑賞態度について」(「中世文学」60、2015年6月)、査読あり。

3. 武井和人・酒井茂幸・山本啓介「国立歴史民俗博物館蔵高松宮本『一人三臣和歌』釈文・略解題」(「埼玉大学紀要 教養学部」50-2、2015年2月) 共著・査読なし

4. 山本啓介「蹴鞠伝授書から見た室町・戦国期における飛鳥井家とその周辺」(「国文学研究資料館紀要 文学研究編」40、2014年3月)、査読なし。

5. 山本啓介「後柏原天皇時代の内裏月次和歌 作風と「談合」」(「和歌文学研究」107、2013年12月)、査読あり。

6. 山本啓介「後柏原天皇時代の内裏和歌活動について 時代背景と形式」(「日本文学」62-9、2013年9月)、査読あり。

[学会発表](計3件)

1. 山本啓介「和歌会部類記について」和歌文学学会例会 2016年1月9日 慶応大学

2. 山本啓介「披講を前提としない和歌の詠作と鑑賞態度について」中世文学学会秋季大会 2014年10月5日 金沢大学

3. 山本啓介「和歌会の形式と詠作意識との関わりについて 室町期を中心に」和歌文学学会例会 2012年7月21日 早稲田大学

[図書](計3件)

1. 鈴木健一・深沢慎二・堀川貴司・山本啓介他『形成される教養 十七世紀日本の知』(勉誠出版 2015年11月)、「公家の学問 三条西家を中心に」(P70~96)を担当執筆。

2. 島津忠夫・井上宗雄・有吉保・片桐洋一・久保田淳監修、山本啓介他多数著『和歌文学大辞典』(古典ライブラリー 2014年12月) 約60項目を担当執筆。

3. 久保田淳編・山本啓介・佐藤智広・石澤一志著『為家卿集 / 瓊玉和歌集 / 伏見院御集』(明治書院「和歌文学大系」2014年5月)、『為家卿集』(P3~125、P292~329、P360~398)を担当執筆。

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者 山本 啓介 (YAMAMOTO KEISUKE 新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授)

研究者番号: 50601837

(2) 研究分担者

()
研究者番号:

(3) 連携研究者

()
研究者番号: